

スルメ作り

社会福祉法人至誠学舎立川 諏訪の森保育園（東京都立川市）

[5歳児]

<きっかけ> プール開きでお供えしたことで興味をもち、スルメを焼いてみんなで食べました。オーブントースターの中で丸まるスルメを見て、「生きてみたい!」「熱い、熱いと言ってるみたいだね」「どうして丸まっちゃったの?」「スルメがイカ?」「やわらかいイカが、どうしてこんなに硬くなるの?」「これ、どうやって作るの?」…子どもたちの好奇心はどんどん膨らんで、自分たちでスルメを作ることになりました。

比べてみよう

スルメイカとシロイカの2種類を用意すると、早速その違いに注目が集まる。「こっちが大きい」「こっちは白い」「足が10本」「こっちは6本」「何センチ?」「重さは?」



作ってみよう（さばく・洗う）

スルメを作るためにイカをさばき、内臓を全て取り除く。取り出したいろいろな臓器に、関心をもって見たり触れたりしながら、次から次へとイカを洗って牛乳パックに置いて準備をする。「わー（内臓が）いっぱい!」「シロイカの骨、でかい。スプーンみたい」「これがイカ墨か…」「この墨で字が書けるかな?」「どこに口がある?」



水晶体を見てみよう

水晶体を見て、「わーっ、宝石みたい」「ビーズみたい」「きれいだね。これが目なんだ」と、水晶体を摘んだり、指先に乗せてみたり、新聞紙の上で転がしたりして遊び始めた。

「あーっ! 虫眼鏡みたい」「よく見える」「逆さまに見えるよ」「反対にしても逆さまだ」「お魚の目はどうなってるんだ?」と疑問をもったことから、数日後、いろいろな魚のカマから水晶体を取り出してみる。「でかっ!」「よく見える」「逆さまに見える」



レンズで遊ぼう

虫眼鏡もかざしてみても、「あー、同じ、逆さまだ」と言う。虫眼鏡と眼鏡で文字を見比べ、大きく見えたり小さく見えたりしてびっくりする。レンズには、凸レンズ・凹レンズがあることを知ると、「園長先生のメガネは大きくなった。凸レンズだね」「お兄さん先生のメガネは小さくなる。凹レンズだね」「イカや魚の目は凸レンズだね」



イカを干してみよう - 天日干し -

洗ったイカをサッカーゴールの上に簾を置いて干す。イカを触って、「ヌルヌルする」「ベタベタする」などと言って、簾の上に乗せる。そこへ、ハエが出現。「不思議〜! どうしてわかったのかな?」「どこに居たのかな?」…園に沢山あるシュロの葉を使って、ハエ叩きを作る。「わあ! 女王様みたい」「うちわみたい」

イカを裏返すと反面が乾いているため、滑り落ちてしまう。「スルスル滑っちゃうよお」「太陽に当たった方はスベスベするよ」「この部分が凄く硬くなってるよ」とイカを触って感触を確かめる。「臭いが違うよ」「日焼けしたから赤くなってきたのかな?」「白いのは何?」毎日裏返ししながら、干すことによる様々な変化に気付く。

スルメの完成

「(プール開きで) 食べたのと同じになったね」「干したら薄くなったね」

完成したスルメイカを、1~5歳児の部屋、調理場の先生たちそれぞれに届けに行き、みんなでいただく。

<考察> 子どもの好奇心から生まれた気付きや発見を大事にし、実際に見たり触れたり試したりできるように具体的に場や物を提示したことで、活動が展開していった。また、子どもの気付きや発見、感動を、その時々で保育者みんなが捉え、共通理解したことで、適切ななかかわりができたのではないかと。更に今後、手作りレンズなどを子どもと一緒に作ることで、より関心の高まりや理解の深まりがでてくるのではないかと。思う。

みどころ

子どもの「スルメがイカ?」という疑問に始まり、「どうして?」「どうやって?」と続く好奇心に、保育者が丁寧に対応しています。子どもたちの心を揺さぶる様々な活動が繰り返され、益々好奇心が膨らんでいく様子がわかります。実際に見たり触れたりして確かめながら、疑問や不思議に対する答えを見つけ納得していく喜びは、さらに深く物事にかかわろうとする意欲にもつながり、「科学する心」が育まれます。